


# こまめな生徒把握で学習イベントを修正。 生徒が自ら選ぶ学びで意欲を向上

徳島県立小松島高校には、中学校時代は学力中位層で、自己決定の経験があまりない生徒が多い。そこで生徒が自ら選んで学習できるよう、放課後課外や朝課外をやめ、多様な学習イベントを打ち出した。生徒をこまめに見取り、年度途中でも活動を修正して、生徒の実態に合ったものになるようにしている。


実践の全体像

## 自分の物語をつくる「松高 未来のためのまなびプロジェクト」

▶ 毎日の学習・生活の振り返り、定期考査の計画・振り返りなどを記入



松高・未来のための手帳  
(P.14 図3)



生徒授業  
(P.14 図2)

多様な学習イベントを実施

手帳コンクール  
(年2回) (P.15 図4)

夏休み数学レポート  
コンクール

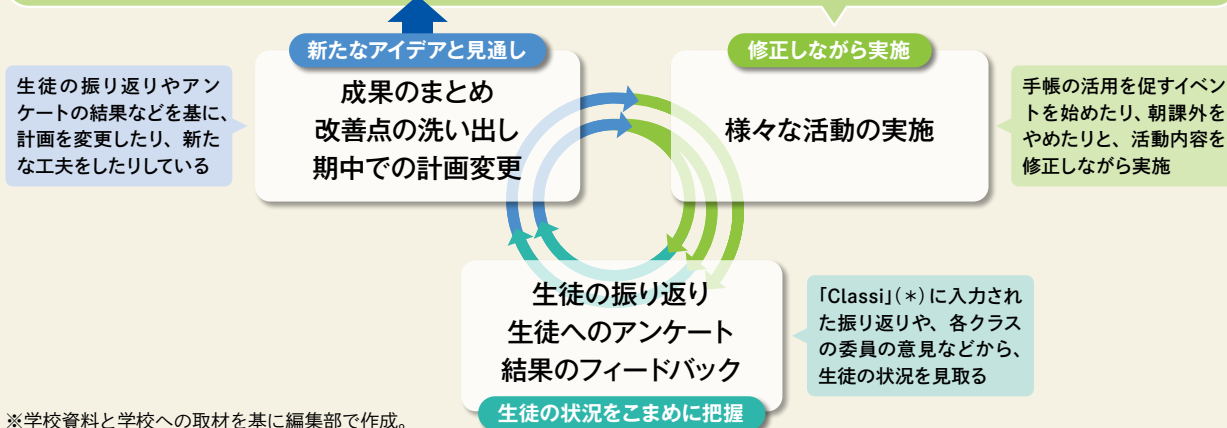
学習マラソン (年5回)  
(P.15 図5)

学力アップ  
チャレンジ週間

松原育樹  
ボランティア

校則の見直し

など



※学校資料と学校への取材を基に編集部で作成。



**姫田史也**  
数学科主任  
ひめだ・ふみや  
同校に赴任して11年目。3学年担任。数学科、情報科。



**久保早耶香**  
企画推進課チーフ、英語科主任  
くぼ・さやか  
同校に赴任して10年目。2学年担任。英語科。



**伊藤奈津子**  
1学年主任、国語科主任  
いとう・なつこ  
同校に赴任して10年目。国語科。



**笠江由美**  
指導教諭、次世代育成支援対策推進委員  
かさえ・ゆみ  
同校に赴任して12年目。数学科、情報科。



**牧野浩章**  
教頭・教務担当  
まきの・ひろあき  
同校に赴任して2年目。地理歴史科（地理）。

**学校概要**

設立 1931（昭和6）年  
形態 全日制／普通科／共学  
生徒数 1学年約170人  
2022年度卒業生進路実績 国公立大は、徳島大、鳴門教育大、香川大、都留文科大、高知工科大、北九州市立大などに10人が合格。私立大は、立命館大、関西大、近畿大などに延べ119人が合格。短大・専門学校進学39人。就職16人。

\* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

# 学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

## 取り組みの背景・全体像

### 若手教師の課題感から、カリマネと併せて改革を推進

徳島県立小松島高校は2018年度、生徒の自走を支えることを目指して、「松高 未来のためのまなびプロジェクト」（以下、プロジェクト）をスタートさせた（P.12図）。そのきっかけは17年度に行った、台湾の高校生の訪日交流事業だ。若手教師が中心となって交流活動を立案する過程で、生徒の実態を整理したところ、自校の課題が浮き彫りになり、教師間で改革の機運が高まった。交流事業の立案に携わった1学年主任の伊藤奈津子先生は、当時を次のように振り返る。

「本校の生徒の多くが、中学校時代は学力中位層であり、生活面でも学習面でも注目や注意をあまり受けてきませんでした。そうした生徒も本校では、自分たちが中心となって学習も学校行事なども進めていきます。そこで、生徒が自分で判断して物事を進める活動をプロジェクトとして行い、生徒の自己肯定感を高めていこうと考えました。新学習指導要領の実施を控えていたこともあり、カリキュラム・マネジメントと併せて、プロジェクトを進めていきました」

当時の校長の後押しもあり、若手教師中心のプロジェクトチームを編成。まず、生徒の学力推移や問題行動が起きやすい時期など、課題を改めて整理し、校内で共有した上で、育成を目指す資質・能力を職員会議で議論した。そして、「自分の物語をつくる」をキーワードに、人間的成長を上位目標とした「身につけたい力」（図1①〜③）を設定し、21年度にはルーブリックを作成した。

同時に、カリキュラム・マネジメントの視点で教育活動を見直した。19年度に課題テストの実施を年5回から3回に変更し、放課後課外を廃止。一方で、学習時間などを毎日記入する生活記録を月1回提出させ、家庭学習習慣の定着を図った。さらに、自ら選んで視聴した学習動画のレポートを書く「学力アップチャレンジ週間」など、任意参加の学習イベントを実施して、生徒に参加を呼びかけた。指導教諭の笠江由美先生は、次のように説明する。

「放課後課外は生徒の成績次第で復活させる条件で廃止しましたが、成績は低下せず、22年度には朝課外もやめました。ただその後、生徒の学習意欲の高まりを受けて、希望者を対象に放課後課外を再開しました。どの活動も、参加するかどうかを選べるからこそ、参加した生徒は意欲的に学びます」

図1 「身につけたい力」と「松高ルーブリック」

校訓

**自主自律  
親和協同  
日新日進**

身につけたい力

**1 自分とむきあう**

- 自分のことを知る
- 自分の目標を持つ
- 自分がやる、自分でやる
- 自分をコントロールする
- 昨日の自分より前進する

**2 人とむきあう**

- 相手と真剣に話す
- 相手の立場で考える
- 相手のことを認める
- 自分の考えを伝える
- 協力して目標を達成する

**3 世界とむきあう**

- 世界のことを知る
- 地域のことを知る
- 情報を適切に活用できる
- 世界・地域の課題を見つける
- 社会貢献への意欲がある

資質・能力	レベル1	レベル2	レベル3 3年次修了時の到達目標	レベル4	F
<b>1 自分とむきあう</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自分について情報を収集し、自分の長所を知っている。①-1</li> <li>● 自分は集団の一員だと感じることができる。①-2</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ①-1、2</li> <li>● 見通しを立てることができる。①-3</li> <li>● 自分をコントロールし、学びに、むかい、試行錯誤を重ねることができる。①-4</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ①-1〜4</li> <li>● 自分の不完全さを受け入れることができる。①-5</li> <li>● 試行錯誤や振り返りを通して粘り強く問題の解決にむかうことができる。①-6</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ①-1〜6</li> <li>● 試行錯誤や振り返りを通して粘り強く問題の解決ができていく。①-7</li> </ul>	いずれも満たさない
<b>2 人とむきあう</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 相手に関心を持ち、相手の立場に立つことができる。②-1</li> <li>● 共感的態度をもって話をする。②-2</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ②-1、2</li> <li>● 相手に理解してもらえるように、言葉や非言語能力を使って自分の考えを述べたり、コミュニケーションを取ったりできる。②-3</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ②-1〜3</li> <li>● 他者を信頼することができる。②-4</li> <li>● 仲間と協力して目標を達成しようとする。②-5</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ②-1〜5</li> <li>● 仲間と協力して目標を達成できる。②-6</li> </ul>	いずれも満たさない
<b>3 世界とむきあう</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自分が住む地域や世界について情報を収集している。③-1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ③-1</li> <li>● 世界や地域の課題を発見している。③-2</li> <li>● 解決にむけた取り組みを考え、めぐるることができる。③-3</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ③-1〜3</li> <li>● 情報を適切に活用することができる。③-4</li> <li>● 自分を生かして社会や他者の役に立ちたいと考えて行動している。③-5</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ③-1〜5</li> <li>● 自分を生かして社会や他者の役に立ちたいと考え、行動し、周囲に働きかけを行っている。③-6</li> </ul>	いずれも満たさない

3つの「身につけたい力」の「松高ルーブリック」を基に各教科・科目のルーブリックを作成し、生徒も教師も「身につけたい力」を授業で意識できる仕組みとした。※学校資料を基に編集部で作成。

意欲を喚起する「生徒授業」

「他者に教える」という目的が主体的な学びを促す

プロジェクトの柱は、生徒が教師役となつて授業を行う「生徒授業(図2)だ。「深く考えることの大切さ」などを生徒が実感することを目的に、笠江先生が17年度に担当した数学の授業で始めた。同級生に加えて、学校説明会での中学生への模擬授業で行ったところ、参加者に好評だった。そこでプロジェクトを機に、「生徒授業」を2年次の「総合的な探究の時間」における探究学習の1テーマとし、中学校への出前授業も開始。校内研修で教師に「生徒授業」の実施ポイントを共有し、各教科が状況に応じて行うようにした。

「他者に教えるためには自分が深く理解する必要がある、自分で何が必要かを考えて学ぶようになります。自らの工夫で他者が理解してくれば、自己肯定感につながります。様々な効果で期待できる活動です」(笠江先生)

意欲を喚起する「松高・未来のための手帳」  
毎日の記入が自己管理能力を高め、自走につながる

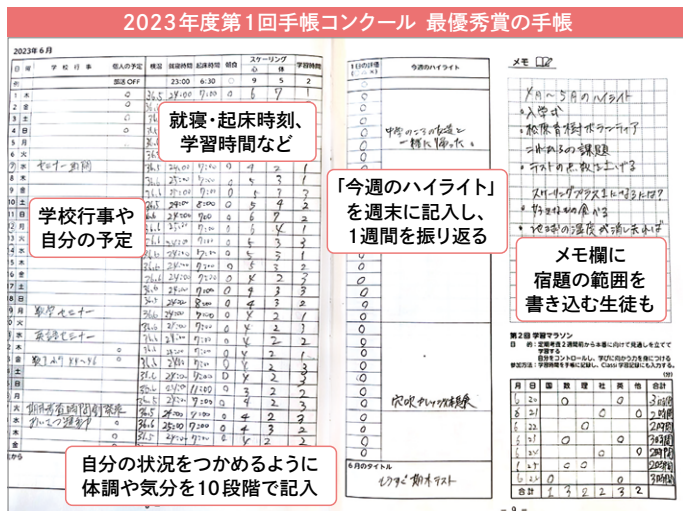
20年度には、生活記録を基に、学習

や学校行事などを記録する「松高・未来のための手帳(以下、手帳)」(図3)を導入した。

「毎日の学習や行事予定などを手帳に書くことは、『来週はこの行事があるから、課題は今週中に取り組んでおこう』などと考える機会になります。書き続けることでメタ認知や自己管理が少しずつできるようになり、振り返りも理由を添えてよかった点や課題を書くようになっていきます。手帳の活用法を共有しようと、『手帳コンクール』(図4)を始めました」(笠江先生)

「手帳」の活用を促す仕かけとして、「学習マラソン」(図5)も始めた。「手帳」に記入した学習時間を1週間分集計し、クラス・個人の上位者を表彰するイベントで、一人ひとりの努力を評価する機会にもなっている。今は学習時間を「Class」に入力させている。生徒の学習意欲がより高まりやすくなったと、数学科主任の姫田史也先生は語る。「Class」で総学習時間がグラフで示されるので、生徒は自分の学習状況を把握しやすくなりました。『前回は数学に時間をかけ過ぎたから、今回は英語に力を入れよう』などと計画を立てられます。『たとえ0時間でも、それを自覚するために毎日入力しよう』と、生徒に呼びかけています」

図3 メタ認知や自己管理を促す「松高・未来のための手帳」



- A5版、64ページ ● 学年ごとに1冊ずつ用意
- 各ページの項目は教師が話し合つて作成した学校オリジナル
- 毎日の生活の記録、定期考査に向けた学習計画と振り返り、委員会や生徒授業の記録、学校行事の振り返りなどを記入。進路を考える材料にする
- 生徒に手帳を定期的に提出させ、クラス担任が生徒の記入に視線を引いたり、コメントを書いたりして返却。生徒が適切にメタ認知し、自己管理ができるようになることを支援している
- 手帳に書かれた生徒の様々な活動記録を、教師は調査書や指導要録を記入する際に活用

※図2・3は、学校資料と学校への取材を基に編集部で作成。

図2 生徒の学習意欲を育む「生徒授業」

概要

- 生徒が教師役となり、校内で授業を行う
- 実施する授業の内容は基本的に、担当学年・教科の教師が提示したテーマを基に生徒が考える
- 学校説明会で中学生に対して行う模擬授業や、中学校への出前授業としても実施

ねらい・効果

学びを蓄えていく視点

小・中・高の学びのつながり

探究する楽しさ

他教科とのつながり

本当の分かるを体感

分かりやすく伝える

主体的に学ぶ楽しさ

自分の成長

伝えたい思いが伝わった達成感

教師役を担当した生徒の声

- 重要な箇所はチョークの色を変えて黒板に書いた。授業を受けた人が「分かりやすかった」と言ってくれてうれしかった。次も頑張りたい
- 数学の授業で、具体的な数をあてはめて説明したところ、先生に「いい説明だね」と褒めてもらった。式が長かったので、短く説明できたのがよかったのだと思う

## 学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

意欲を喚起する「生徒の声の活用」

### 生徒の声をキャッチし、 年度内でも活動を修正

活動は、生徒や活動の状況を見取り、年度途中で修正したり、新たに始めたりと、より効果的なものになるようにしている。その判断材料の1つが、生徒の振り返りだ。主要な活動では、生徒が「Classi」に入力した振り返りの中で他の教師や生徒に共有したい内容を、教師がコピー&ペーストしてための、「Classi」を共有している。

生徒の声を直接聞き、活動に反映することも大切に行っている(図6)。例えば、「学習マラソン」に対する改善点を各クラスの委員長に聞いたところ、「1週間前はみんな勉強するから、2週間前の方がよい」という意見が出たため、実施期間を定期考査2週間前からの1週間に変更した。

また、生徒や保護者にICTでアンケートを取り、その結果を活動に生かすこともある(図7)。企画推進課チーフの久保早耶先生は、次のように語る。

「Classi」のアンケート機能の活用によって、生徒の声をタイムリーに把握することができるようになりました。自分たちの声が反映されることを

経験した生徒は、学校生活に対して積極的になっています。学校への満足度は、年度末には入学時と比べてかなり上がります」

### 取り組みの成果・展望

### 保護者の約8割が子どもの学習意欲の向上を実感

プロジェクトを始めてから、生徒は長期休業明けも落ち着いて学習に取り組むようになった。卒業時には、生徒から「3年間、学習を頑張った」「課外活動など、たくさんチャレンジができた」といった声が聞かれ、保護者へのアンケートでは約8割が「入学後、子どもの学習意欲が高くなった」と回答した。また、「松高ループリック」の自己評価を行ったところ、生徒の1年次1月の自己評価が教師の評価と一致し、生徒のメタ認知能力が上がったことを実感したという。牧野浩章教頭は、今後の展望を次のように語る。

「参加する活動を生徒が自分で選ぶというスタイルが、生徒の主体性を尊重することにつながり、結果的に学習意欲や自走力を高めていると感じています。学校全体が落ち着き、学習に向かう環境が整ってきた中、学力向上はおのずと実現されると考えています」

図6 生徒の声を反映して修正した活動(例)

- 「手帳」のメモ欄を、罫線ではなく、マス目に変更
- 校則の見直しについて、各クラスがホームルームで話し合い、生徒総会と職員会議を経て決定。靴下の規定やアルバイトの条件が緩和された
- 中学校での「生徒授業」で、教師が設定したテーマの中から選ぶ形から、生徒が自分でテーマを考える形に変更。加えて、訪問先の中学校を教師が割り振るのではなく、各生徒の母校に変更

図7 生徒にICTで取ったアンケート(例)

- 「松高ループリック」(P.13図1)について、生徒の自己評価のアンケートを1年次4月と12月に実施
- 卒業式の退場曲は、3年生にアンケートを取って決定
- 生徒と保護者に学校評価のアンケートを年度末に実施

職業調べ (P K・現代の道 路)	その他	R5 1年生	158/1 68	145/16 8	2023/11/20 19:25	集計
イチョーが 伝えたいこ とは?	その他	R5 1年・2年・3 年	285/5 02	93/502	2023/11/16 14:20	集計
保健アンケ ート(心身 の健康と)		R5 1年・2年・3 年	416/8	397/50		

アンケートは「Classi」で配信。回答率が低い場合は、教師が口頭でも生徒に回答を促す。

※図4～7は、学校資料と学校への取材を基に編集部で作成。

図4 「松高・未来のための手帳」の活用法を共有する「手帳コンクール」

自分の「手帳」の活用法を、該当のページの画像と200字程度の説明文とともに「Classi」のポートフォリオから応募。校長と教頭、学年主任が、ほかの生徒に参考にしてほしいと思った活用法を最優秀賞、優秀賞、審査員特別賞として選出。年2回実施。



図5 学習時間を見える化する「学習マラソン」

定期考査の2週間前からの1週間、生徒が教科別の学習時間を「Classi」に入力。総学習時間の上位3クラスと個人上位3人を学年別に表彰する。参加は任意で、年5回実施。1週間の学習時間を教科別にグラフにして、全校に発表する。生徒からは、「計画を立てて勉強することができた」「モチベーションが上がり、学習時間をいつもより増やすことができた」といった声が上がっている。

